

主な未侵入病害虫の解説

アメリカリンゴコシンクイ

学名: *Grapholita purnivora* (Walsh)

英名: lesser appleworm

本種はもともと北アメリカ大陸でサンザシ等の野生のバラ科植物の果実についていたものが、ヨーロッパからりんごの栽培種が導入されると共に、栽培種を加害するようになったと考えられている。

分布 北アメリカ(アメリカ合衆国、カナダ)

寄主 リンゴ及びモモ、スモモ、オウトウなどのPrunus属、サンザシ属、バラ属、カナメモチ属などの果実

形態 成虫は翅の開張が約10mmの小型の蛾で、体色は黒褐色。前翅にオレンジ色の小斑が散在し、3～4本の青い条紋があることで、他の近似種と区別できる。

卵 卵は扁平な楕円形で、表面には不規則な網目模様がある。

幼虫 幼虫は老熟すると約8mmで、体色がピンク色になる。この色はエチルアルコール標本にして

も脱色されず、この特徴が近似種との識別点となる。

蛹 体長5mmで黄褐色である。

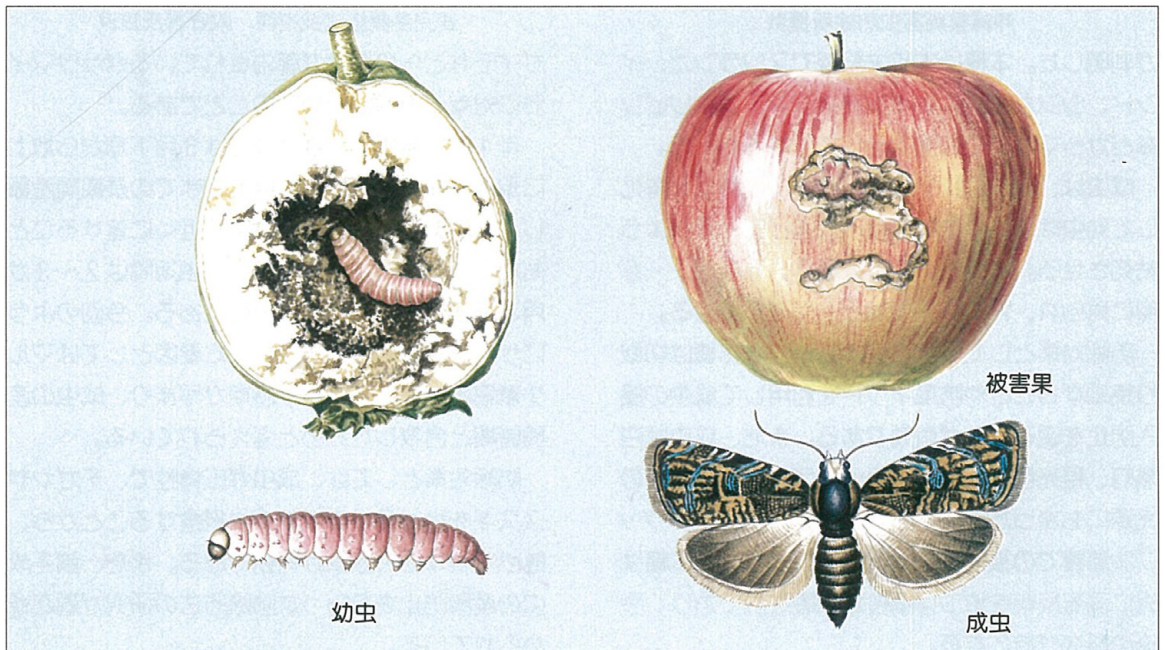
生態 通常年2回発生し、老熟幼虫で越冬する。越冬後、5月下旬に羽化した成虫は6月ころまでに寄主植物の葉上や幼果表面に1個ずつ産卵する。

孵化した幼虫は、果実に食入し、7月中旬～8月上旬にかけて老熟する。老熟幼虫は果実から脱出し、物陰などで繭を作り蛹化する。

8月中に第1世代目の成虫が羽化し、第2世代目の幼虫が8月下旬～10月上旬に老熟する。その後、寄主植物の樹幹の割れ目や地上の被覆物の下などに潜り込み繭を作り越冬する。

被害 幼虫が主に果実を加害し、希に若枝、芽にも食入することもある。リンゴ果実では食害部は萼あ部もしくは果梗に集中する。また、果実の比較的浅い部分を主に食害する。一般に第1世代目よりも第2世代目の幼虫による被害が大きい。

防除法 PMP、ホサロン、MEP、NAC等のコードリンガ殺虫用の薬剤で防除できる。



ヒポキシロン胴枯病

学名: *Hypoxylon mammatum* (Wahl.) Miller
英名: Hypoxylon canker

本病は樹幹に発生する病害で、米国の五大湖沿岸の一部地域では、ポプラの一種であるアスペンが年間1～2%枯死しており、その被害額は440万ドルと推定されている。ウイスコンシン州ではポプラの24%が犯され、ミシガン州では15～20%が枯死したとの報告がある。

分布: 北米、ヨーロッパ、旧ソ連、オーストラリア

寄主: ポプラ、ヤナギなど

病徴と被害: 病徴は主に幹と枝に現われる。感染初期のポプラでは樹皮に黄～橙色で周りが不整形のやや凹んだ病斑を生じ、それらが徐々に拡大して、やがて灰色のかいよう斑を形成する。かしよう斑が幹を一周すると樹木は枯死する。

病斑部の樹皮を削って断面をみると、黒色の幅広い帯と明色の狭い帯が斑入状になっているのが見られる。前者は黒色の

菌糸が充満した皮層であり、後者は菌に侵されなかった層である。

木部も侵され、樹皮を剥ぐと白色の扇状菌糸が見られることもある。また、辺材部が黒変すると、樹皮は病斑部から剥がれやすくなり、り病樹は風などに対して極めて弱く折損しやすい。

樹幹にかいよう斑ができた場合、二次的な菌などの感染も加わり、3～8年以内に枯死することが多い。アスペンが感染した場合、径6～9cmの若木(胸高)が最も高い枯死率を示したという報告がある。

病原体: 子座は球形で、樹皮上(内)に散在して形成される。堅質の樹種上で形成した場合、子座は約2mmの厚さとなり、軟質の場合では低く平らとなり、表面は顕著な乳白色から成熟すると黒色の炭質となる。

子のう殻は子座内に多数生じ、大きさ0.7～1.2mmの球形・卵形を呈する。子のうは円筒形で、長柄と8個の子のう胞子を有する。子のう胞子は長

楕円形で褐色～暗褐色をしており、縦の発芽孔がある。分生子柄束は円筒形で褐色～暗褐色である。分生子は無色・単胞で楕円形をしている。

米国ミネソタ州での調査によると分生子柄束は5～6月に子座は8～9月に多数観察されている。本菌は菌糸体または子のう胞子の状態で越冬し、子のう胞子で風媒伝染する。感染は、主に樹皮

や枝にできた傷をとおして行われる。

防除: 傷口がカルス化する抵抗性品種の育成にいくつか成功事例が知られている。り病部の削除も幹のかいよう斑の発生を軽減する。またポプラ単独でなく混栽帯として栽植することが推奨されている。



樹幹の病徴

子座の表面